

編集手帳



「風邪をこじらせたら肺炎になるよ」

子どもの頃、親に散々注意されたこのフレーズは、最強の俗説といっても過言ではないと思う。数十年を経て医師となった現在、親となり寒い日に半袖のわが子を見るとつい口に出そうになるが、はたして感冒すべてがこじらせると肺炎になるのかは甚だ疑問である。

肺炎と聞いて、われわれ医療従事者の多くが想定するのは細菌性肺炎であり、感染状況による起炎菌の違いから市中肺炎と院内肺炎に分類されてきた。最近では医療・介護関連肺炎という病名が提唱されているが、高齢化率の上昇とともに医療・介護施設も多様化し、誤嚥や耐性菌の問題を抱えたこれらの肺炎は臨床医にとって頭の痛い問題である。2020年にCOVID-19パンデミック時代を迎え、新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)による肺炎が大きく注目された。当初は予防接種もなく、重症化すると致命的となるCOVID-19肺炎の恐怖に全世界の医療従事者にも緊張が走った。まさに「風邪をこじらせると肺炎になる」を思い知らされた適例ではなかったかと思う。

さて、実臨床において肺炎の診断は適切になされているだろうか？ 熱、咳、痰が出ていて、胸部X線を撮ったら肺に影があったから肺炎、と言いたいところだが、そんなに単純ではない。最近ではCTが普及し、より細かい肺の陰影の評価を行うことができるようになったが、救急で細菌性肺炎と診断されて加療開始されたにもかかわらず、一向に改善が得られない症例を時々経験する。抗菌薬のスペクトラムが当たっていないのか、はたまた細菌性以外の原因による肺炎なのか、そもそも肺炎ですらないということもよく経験する。高齢者の肺炎には心不全を合併することが多く、そうすると肺炎の陰影なのか心不全による肺の陰影なのかを鑑別することは決して容易なことではない。ぼやくように恐縮ではあるが「たかが肺炎、されど肺炎」である。

本特集では一筋縄ではいかない肺炎症例が数多く紹介されている。日常診療の参考となれば幸いである。

牧 尚孝

臨床雑誌 内科 第133巻2号(第800冊) 2024年2月1日発行

監修：杉本恒明 黒川 清 矢崎義雄 木村 哲 小俣政男 宮坂信之 永井良三
編集委員会：神田善伸(委員長) 國松淳和 中村 造 立石知也 牧 尚孝
編集兼発行者：東京都文京区本郷三丁目42番6号 小立健太
印刷所：東京都江東区亀戸七丁目2番12号 三報社印刷株式会社
装丁：渡邊真介

発行所
株式会社 南江堂

〒113-8410 東京都文京区本郷三丁目42番6号
出版(「内科」編集室直通) Tel: 03-3811-9984 Fax: 03-3811-8660
営業(販売1課/卸) Tel: 03-3811-7239 Fax: 03-3811-7230
<https://www.nankodo.co.jp/>

本誌に掲載する著作物の複製権、翻訳・翻案権、上映権、譲渡権、公衆送信権(送信可能化権を含む)、貸与権、二次的著作物の利用に関する著作権者の権利は、株式会社南江堂が保有します。

JCOPY 出版者著作権管理機構 委託出版物)

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構(Tel: 03-5244-5088, Fax: 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。

広告申込所 〒113-0033 東京都文京区本郷5-24-6 本郷大原ビル6階 株式会社文京メディカル(Tel 03-3817-8036)